

▼被災地でのボランティアコンサートの様子



「二度しかない人生、いつ死ぬかは誰にも分からない。もう一度音楽をやろう。そして悔いのない生き方を探そう」と決心し、曲作りを再開。51歳の時に会社を辞

めた。自分は今のままでいいのか」と考えるようになり、父が棺桶の中から「悔いのない生き方をしろよ」と言ってくれた気がしたといいます。

ギターの優しい音色に乗せ、家族や自然、故郷をテーマとした歌のライブ活動を行うのは、周東町在住のシンガーソングライター・毛利治郎さんです。高校2年生の時に、反戦歌などメッセー

ジ性のあるフォークソングの存在を知り、自分の思いを歌で表現できることに興味を持ったという毛利さん。曲を作って友達と自主コンサートをす

るなどの音楽活動を大学生まで続けていました。しかし周りの友人が皆就職していく中、それまで思い描いていた音楽を仕事にする生活に不安を感じ、地元

の会社へ就職。それ以来、音楽をやめてしまします。

サラリーマンとして普通に生活していた40歳の時、父親が病気で亡くなり

ます。「本当に父は幸せだったのだろうか。自分は今のままでいいのか」と考

えるようになり、父が棺桶の中から「悔いのない生き方をしろよ」と言

ってくれた気がしたといいます。

「二度しかない人生、いつ死ぬかは誰にも分からない。もう一度音楽をやろう。そして悔いのない生き方を探

そう」と決心し、曲作りを再開。51歳の時に会社を辞

めた。自分は今のままでいいのか」と考えるようになり、父が棺桶の中から「悔

いのない生き方をしろよ」と言ってくれた気がしたといいます。

「二度しかない人生、いつ死ぬかは誰にも分からない。もう一度音楽をやろう。そ

して悔いのない生き方を探そう」と決心し、曲作りを再開。51歳の時に会社を辞

めた。自分は今のままでいいのか」と考えるようになり、父が棺桶の中から「悔

いのない生き方をしろよ」と言ってくれた気がしたといいます。

「二度しかない人生、いつ死ぬかは誰にも分からない。もう一度音楽をやろう。そ

して悔いのない生き方を探そう」と決心し、曲作りを再開。51歳の時に会社を辞

めた。自分は今のままでいいのか」と考えるようになり、父が棺桶の中から「悔



「悔いのない生き方」

を探して

Vol.81

毛利 治郎さん
(周東町在住)

シンガーソングライター。長年勤めた会社を51歳で辞め、音楽一本の暮らしを始める。各地でのライブ活動のほか、講演会、東北の被災地を訪れての音楽を通じたボランティアなど、精力的に活動を続ける。



▲周東町の田んぼで行われた「田んぼコンサート」



▲新潟県～静岡県を渡る糸魚川静岡構造線約300kmを徒歩で縦断に挑戦